読書案内２０２５

狭山工業高校図書館

～狭工生に読んでほしい 先生のおすすめ本～

校長先生 おすすめ

『新井紀子の読解力トレーニング』

新井紀子（東京書籍・2025）

著者の新井紀子氏は、日本を代表する数学および人工知能（AI）の研究者です。難関の東京大学の入試問題を人工知能に解かせる研究プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」を通じて、現代の日本人には【読解力】、つまり「論理的に文章を正確に理解する力」が不足していることを指摘しています。

新井氏は、業務マニュアルやメールの内容を正しく理解できない社会人が多くいること、中高生の多くが教科書を正確に読めないまま卒業し、大学でも授業内容を理解できないまま卒業するケースが増えていることを、これまでも著書を通じて訴えてきました。

本書では、そんな「文章を正確に読む技術」を身につけるために、どのようなトレーニングを行えばよいのかが具体的に解説されています。表紙には「小学生のうちに身につけたい」と記されているように、小学生でも取り組めるよう、かわいい動物のキャラクターが登場するなど、読みやすさへの工夫が施されています。また、定期考査や小テストなどが返却されたら間違えた問題を解きなおすなど、高校生にもぜひ実践してほしい勉強法も書かれていて、高校生の皆さんにも読んでもらいたい内容です。ぜひ本書を手に取り、読解力トレーニングを実践してみてください。

電気科 A 先生 おすすめ

『君の膵臓をたべたい』

住野よる（双葉社・2015）

すい臓は沈黙の臓器と言われる三つの臓器のうちの１つ。症状が現れにくいのでそう言われている。
すい臓は、食べたものを消化するための「膵液の分泌」と、血糖値の調節をする「ホルモンの分泌」をしているそうです。

余命が宣告されたとしたら、残された時間をどう生きますか。主人公の彼女はそれを知っています。
そして、偶然その秘密を知ったクラスメイトは、彼女とどう接したのでしょうか。人はいつ死ぬか分かりません。でも、私たちは毎日必ず明日が来ると信じて過ごしています。最後は悲しい気持ちになるかもしれませんが、彼女の生き方に励ましてもらえるでしょう。高校生のみんなに読んでもらいたい物語です。

『街角ファンタジア』

村山早紀（実業之日本社・2024）

最後に心温まる短編５話です。そこに猫がいます。多分、現実にはこんなことは起きないでしょう。

でも、どこのニュースを見ても事件、事故、戦争のことばかり、自分の身の回りの出来事も不安なことばかりの世の中なので、この話を読んだら少しは気が休まるかもしれません。

『木挽町（こびきちょう）のあだ討ち』

永井紗耶子（新潮社・2023）

江戸の木挽町（こびきちょう）で、若侍が見事に父のあだ討ちを成し遂げた。菊之助は、そのあだ討ちの模様を詳しく知りたいと方々で聞いて回ると、その場には大勢の目撃者がおり、「それは、それは、立派なあだ討ちでした」。と口をそろえて証言してくれる。しかし、調べていくうちにその真相が次第に明らかになっていく。そこにはどんな人情話が隠されていたのか。あだ討ちという血なまぐさい内容のように思えますが、安心して楽しめる内容です。

『コーヒーが冷めないうちに』シリーズ

川口俊和（サンマーク出版・2015～）

そのコーヒー店には過去に戻れる席があるという。しかし、過去に戻れる時間はコーヒーが冷めてしまうまでの時間、それに、過去は変えられないと言う条件付き。でも、そこを訪れる人は何か過去に後悔を持っている。過去は変えられなくても、過去に戻ったことで気持ちの整理が付き前を向いて生きられるようになっていく。

皆さんの中にも、後悔していることがありますか。でも、この本を読むと過去に戻れなくても、自分の見方、考え方を少し変えることができるかもしれません。それができれば前向きに自分のもらいを考えられるようになるかも。

『地雷グリコ』

青崎有吾（KADOKAWA・2023）

本の題名を見て、子供の遊びをもじったミステリー小説ってあまり面白そうじゃないな。と思っていた。しかし、直木賞候補になったこと、埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本の一つに選ばれた時のコメントに「変なゲームのお話です」と、一言のみ。その控えめな紹介文に興味がわいてきた。

内容は、女子高生射守矢真兎(ｲｵﾘﾔ ﾏﾄ)が５つのゲームに挑戦する。力の抜けたいい加減な女子高生に見えるが、類い希な洞察力と、理解力で思いも掛けない方法で、勝負に勝っていく。そして、クライマックスの大勝負へ。子供の遊びをもじったゲームだが、いくつかルールが追加されただけで
難易度の高いゲームになっていて、思考力を刺激される作品だ。

『さくらのまち』

三秋縋（実業之日本社・2024）

さくらは桜ではなく、客引きのために店とグルになる偽物のお客の意味。

背景は少し未来かもしれない。自殺願望がある人と政府から判断されると、その人を秘密裏にサポートする桜が送られてくる。それはクラスメートかもしれないし、親戚かもしれない。

主人公の仕事は、出会い系サイトで出会いを求めてくる人からお金をだまし取る仕事。自殺願望を持ちながらも、そのことは知られまいとして、他人との関わりをなるべく少なくしている。過去にその“さくら”を送り込

まれ傷ついた経験を持つ。
　ある日、彼のさくらだった中学の同級生の女の子が自殺した、という知らせを受ける。

数学科 〇 先生 おすすめ

『みきのミキサーごはん
　　みんなと一緒においしいごはんが食べられる 食べたかったものをおいしく食べる』
　　藤原美紀・土方裕美・岩波君代（鳥影社・2024）

　私は数学の教師（きょうし）です。
生徒たちからときどき「数学なんかできなくても生きていける」「数学なんていらない」と言われることがあります。

　ところで、「味覚（みかく）が無くても生きていけます」理論上（りろんじょう）は栄養（えいよう）を摂取（せっしゅ）すれば生物は生きていけるからです。
腐って（くさって）いるとか、毒（どく）だとか、危険（きけん）な食べ物を見分ける必要が無い、安全な食べ物だけを提供（ていきょう）されるのなら、「味覚はいらない？」
現（げん）に食事をプロテインで代用している人たちもいるという噂（うわさ）も聞きます。
だけど、自分の体に味覚を装備（そうび）することが可能なら、「味覚は必要だ」と私は思います。

　この本は、料理の本です。

　筆者（ひっしゃ）の藤原美紀（ふじわらみき）さんは、生まれつき筋肉（きんにく）が徐々（じょじょ）に衰えて（おとろえて）いく病気で、２歳半から２８歳まで個人的な発言は認めて（みとめて）もらえない、外部の情報を知る手段（しゅだん）の無い、閉鎖的（へいさてき）な施設（しせつ）で生活していたそうです。
　それでも２０代になってからは知り合ったボランティアさんたちと友達になり、ショッピングや外食など外出を楽しむことができるようになりました。

　しかし、ある日突然（とつぜん）、食べ物を飲み込む筋力（きんりょく）が弱って、固形の食べ物を飲み込むことができなくなってしまったそうです。
　友達は藤原さんが皆と同じ物が食べられないことに気を遣って（きをつかって）食事に誘って（さそって）くれなくなり、藤原さんは孤独（こどく）な気持ちになりました。
　藤原さんは「ミキサーで細かくした食事」＝「ミキサー食」が食べられます。
だけど、それが食べられなくなると「流動食（りゅうどうしょく）」といって、鼻（はな）からチューブを入れられて直接お腹に栄養（えいよう）のある液体（えきたい）を入れられることになります。
ところが施設の「ミキサー食」は粒（つぶ）や繊維（せんい）が残っていて飲み込めません。そのことを職員（しょくいん）さんに伝えると、施設では個人的なお願いを聞くことはできないから、「流動食」にするしかないと言われてしまいました。

　皆さんは、自分にはまだ口から食べる力があるのに、鼻から入れられたチューブで食事をしたいですか？
「流動食」になりたくない藤原さんは、施設で提供される粒の大きな「ミキサー食」を食べられないのに、食べたフリをしていたそうです。

フリといっても、ほとんど動けない藤原さんは捨て（すて）たり隠し（かくし）たりできませんから、食べていないことは職員さん達にわかるはずなのに、ほとんどの職員さんが自分に無関心（むかんしん）に見えて、友達と会えないことも手伝って、藤原さんの孤独感（こどくかん）はさらに深くなりました。
目の前の食事を飲み込むことができないけれど、お腹が空いていることに、何週間も苦しんだそうです。

だけど、ある日看護師長（かんごしちょう）さんが「せめてこんなものででもエネルギーを補給（ほきゅう）しないと」と、こっそりチョコレートをくれたことから、気にかけてくれている人がいると思えてなんとなく前向きになったそうです。
前向きになった藤原さんは、固形物（こけいぶつ）を食べることができなくなった自分の体を受け入れて、友達と食事に出かけられる方法を考え始めました。
そして、友達や家族との外出やお泊りをするときに一緒に食事をするのに、小型のミキサーがあればいいと思いつき買ってみたそうです。

小型のミキサーのアイデアは大当たり！できることが増えた藤原さんは、さらに前向きになり、施設を出て介助者（かいじょしゃ）さんを派遣（はけん）してもらって自立生活（じりつせいかつ）に挑戦（ちょうせん）することに決めました。
このことは重い（おもい）障害（しょうがい）のある人にとって、ものすごい勇気（ゆうき）だと思います。

藤原さんが自立してからは、「飲み込みづらくなっても、料理をミキサーにかければ食事をできる人はたくさんいます」ということを、いろんな人に知ってもらおうと考えて、積極的（せっきょくてき）にいろんなレストランに事情を話して外食をしているそうです。
断られることも、親切（しんせつ）な対応（たいおう）をしてもらうことも、ちぐはぐな対応をされるときもあったそうです。
そんな前向きな藤原さんでも、初めのころはコンセントを借り（かり）ないといけなかったので、コンセントを理由（りゆう）に断わられる（ことわられる）ことも多く、心が折れそう（おれそう）になることもあったようです。

【ここからが、工業高校の皆さんに注目していただきたいところです。】

この、「コンセント問題」を知った藤原さんのお友達が、知人のエンジニア宮崎（みやざき）さんに相談したらバッテリー感覚（かんかく）で使える小型の外出用装置（がいしゅつようそうち）を苦労して試作（しさく）してくれたそうです。
その装置（そうち）のおかげで、藤原さんは念願（ねんがん）の屋台（やたい）食（しょく）を友達と一緒に楽しむことができた！
初めての屋台での食事は、一緒にいた人たち全員の願いが叶った（ねがいがかなった）ような楽しい時間だったと「あとがき」にありました。
外出用装置のおかげで藤原さんが出来ることがさらに増え（ふえ）、災害時（さいがいじ）の避難所（ひなんじょ）生活への不安も小さくなったそうです。

私は、研究（けんきゅう）が認められてノーベル賞をもらうよりも、発明品がヒットして大儲け（おおもうけ）するよりも、こんな風に自分が助けたい人の力になれる宮崎さんのようなエンジニアが一番カッコイイと思います。

自分が死んだ後も、藤原さんを助け続けるなんて、なんてロマンのある話でしょう！

ただ「生かされ続ける」だけなら、きっと「味覚も学びも要らない」でしょう。
だけど、自分がよりよく「生きる」ためには、「味覚も学びもあった方が良い」。
さらに、「他人をサポートすることができる人になりたい」のならば、未来を見られない私たちは試行錯誤（しこうさくご）しながら、自分の能力（のうりょく）を増やす（ふやす）しかありません。
努力すれば自分に装備（そうび）できる能力がある。
あなたは「諦め（あきらめ）ますか？」それとも、「努力（どりょく）しますか？」

努力と工夫（くふう）と様々な（さまざまな）人たちとの協力（きょりょく）関係（かんけい）を、さらに、自分と似た（にた）ような苦労を抱えて（かかえて）いる人たちのことを、そして何よりおいしさを、諦め（あきらめ）なかった藤原さんの優しさ（やさしさ）にあふれたレシピの数々をご覧（ごらん）ください。

『二番目の悪者』

林木林（小さい書房・2014）

すみません。
読んでみたい絵本を書きました。
まだ、読んだことがありません。
だけど、フェイクニュースがあふれている現代（げんだい）に生きる人たちに読んで欲しい（ほしい）本らしいので、私も読んでみたいと思っています。

司書　N　おすすめ

『銀座「四宝堂」文房具店』

上田健次（小学館・2022）

『銀座「四宝堂」文房具店』は、銀座の老舗文房具店が舞台の 人と人の繋がりのあたたかみが感じられる作品です。小説や漫画では、書店を舞台にした小説は多い一方で、文房具店が舞台になっている小説は少ないように思います。作者の上田健次さんは、編集者と話し合う中で、本が好きな人は何が好きかと考え、文房具が好きではないかと考えたことからこの作品が生まれたそうです。

「四宝堂」の店主・宝田硯（たからだ けん）はホテルのコンシェルジュのような丁寧で品のある佇まいで、いかにも銀座の老舗文房具店にいそうな雰囲気です。そして、丁寧さの中に思いやりの心があり、来店客一人ひとりに寄り添い、接客を通じて悩みを解決へと導く後押しをしてしまいます。読んでいる途中から私も「四宝堂」に行ってみたくなってしまいました。

作中には実在する文具も登場します。みなさんになじみのあるメーカーの名前も出てくるかもしれません。読んだ後は文房具店に行ってみたり、登場した文房具を探してみたりしたくなります。

『生きる言葉』

俵万智（新潮社・2025）

言葉は、時として意図しない形で相手に伝わってしまうことがあります。共に過ごす時間が長い家族や友

達であっても「そんなつもりで言ったわけじゃないのに、違う意味で受け取られてしまった……」と思うことも。インターネットが発達してからはメールやチャットを介して、顔が見えない状況で言葉をやり取りする機会も増えました。さらに、誰でも簡単に言葉を広く発信できる時代です。そんな今だからこそ読んでほしい１冊です。

『生きる言葉』の中でも特におすすめしたいポイントは、「はにかみと思いやりのずらし話法」（「２　ダイアローグとモノローグ　『愛の不時着』リ・ジョンヒョクの言葉」P.56～）です。ユーモアを交えたスマートな切り返しで、相手に負担を感じさせない思いやりの話術です。

また、「クソリプ」、「マルハラスメント」、「おばさん構文」、「〇〇キャンセル界隈」など、話題のテーマについても書かれています。「４　言葉が拒まれるとき　クソリプに学ぶ」（P.92～）では、クソリプを８タイプに分類した「クソリプの分類図」に基づき、SNS 上に散見されるクソリプの構造が解説されています。他人の心ない言葉に振り回されないよう、自衛のためにその構造と対処法を確認しておくのもおすすめです。

『大人も知らない みのまわりの謎大全』

ネルノダイスキ（ダイヤモンド社・2025）

鳥はなぜ電線にとまっていても感電しないのか？ビルの壁の「定礎」は何か？など、見慣れた風景の中の疑問を解消する本です。踏切の警報が鳴り始めてから遮断機が降りるまでの秒数、鳩の歩き方など、知ると世界の解像度が上がるかも？

１テーマ４～６ページでまとめられていて、イラストが多くわかりやすいです。また、各テーマごとに独立しているため、どこからでも読み始められます。

『サトウさんの友達』

益田ミリ（マガジンハウス・2025）

人間関係に疲れた時、悩んだ時、やさしく癒してくれる漫画です。

「あつまれ どうぶつの森」をきっかけに出会った二人は、「あつ森」世界のような人間関係で接することを望みます。その関係性は気負いがなく、自然体でさっぱりとしています。

「『探していたよね？』と、特に求めていないアイテムをプレイヤーにプレゼントしようとゴリ押ししてくる住人のどうぶつ」など、「あつ森」あるあるも散りばめられているため、「あつ森」が好きな人もぜひ読んでみてください。

紹介した本は図書館にて展示中です。

展示中の本も借りられます。